

出張報告届

令和4年10月17日

吹田市議会議長様

会派名 民主・立憲フォーラム

代表者氏名 山本 力

出張者氏名 木村 裕

.....
.....
.....
.....
.....

下記のとおり出張したので届け出ます。

記

出張先	出島メッセ長崎
期間	令和4年10月13日 から 10月14日 まで 2日間
出張の成果	別紙のとおり
備考	



全国都市問題会議

個性を活かして「選ばれる」まちづくり～何度も訪れたい場所になるために～

2022年10月13日・14日 於 長崎市、出島メッセ

・基調講演

「民間主導の地域創生の重要性」

㈱ジャパネットホールディングス代表取締役社長兼 CEO の高田旭人氏

・主報告

「長崎市の魅力あるまちづくり」

長崎市長 田上 富久氏

・一般報告

「何度も訪れたい場所 都市の新たな魅力関係人口」

島根県立大学地域政策学部准教授 田中輝美氏

・一般報告

山形市長 佐藤孝弘氏

『ビジョンを生かしたまちづくり～「選ばれる山形市」を目指して～』

・一般報告

「交流の産業化」を支える景観「まちづくり」～長崎市景観専門監の取り組み～

一般社団法人地域力想像デザインセンター代表理事 高尾忠志氏

◎基調講演について

高田氏は「ジャパネットタカタ」の代表取締役で、長崎市を中心に地域密着企業として先代より引き継ぎ、2017年からはプロサッカークラブ「V・ファーレン長崎」100%出資で地域創生の取り組みをスタートさせ、2020年プロバスケットボールクラブ「長崎ヴェルカ」を立ち上げ運営もスタートしている。

三菱重工が空き地で売りに出るというタイミングでもあったので、その跡地に「長崎スタジアムシティプロジェクト」を進めることに。

「行政と民間の役割」という事を意識し、行政には公平性が求められており、行政でスタジアム等運営すると、どうしても、自由に使えることができず「無駄」も多くなるのでは。

一方、民間で行うと、その「無駄」も利用する価値がでてくるのではと。

サッカーの試合やバスケットの試合、またイベント開催時にはできるだけ長い時間滞在してもらおうためのアイデアとして、長く駐車すればするほど料金が安くなるというこれ

までにない発想や、年間シート購入者には高速 Wi-Fi を提供し特典を提供するなど、またスタジアム、アリーナ等の非稼働日の利用法や、VIP ルームをホテルとして利用するなど多様な発想で進めている。

「人が動いてこそ幸せが生まれる」というポリシーを持って事業を展開しているとの事で、コロナ禍で休業する店舗等で扱う高級食材が廃棄されることがニュースとなったのを見て「高級食材」の通販にも取り組み「赤字になってもいいので思い切ってやってみよう」を合言葉に事業を展開し、生産者、生産地の自治体に喜ばれ、お客さんも喜ぶという相乗効果も出てきている。

また、スターフライヤーとの提携ですが、出発から到着までパッケージの一つと考え、大きな荷物は先にホテルまで届けることで手軽に飛行機を利用でき、地方への目も向けることができる。またテレビ局のノウハウがあるので「安全なしおり」を楽しく作り上げその事により移動する楽しさを訴え、行動する事により地方への人の流れ、行ってみたい地域へ気軽に楽しく向かえられるようになるのではと提案。

最後に、企業の立場で地方創生を本気で行政と進めたい。若手起業家で地元貢献したい経営者も沢山いるが、何をしたいのかわからないと言われているし、また行政でも地元を盛り上げたいという想いを持った職員も沢山いるので、これら企業側と行政がタッグを組んで進めることが重要であると強調した。

◎主報告について

港があったからこそ長崎の歴史があり、その歴史を踏まえて行政だけが行うのではなく、企業とタッグを組んでいくことが重要である。

そんな中で都市部の機能を落とさないようにしなければならないし、元気な街であり続けようと努力することが大切である。

長崎市は狭い空間の中で色んな機能を持たした「まちづくり」を目指しており、新幹線と在来線が混じっているホームがあるのは全国唯一長崎駅だけ。

コンパクトな「まちづくり」を目指しており、駅舎は夜景にも損なわないデザインをと心がけて、長崎駅を中心とした「まちづくり」が進めている。

わがまちの価値～価値を見つける

もう一度まちの価値を考えてみる機会も多かったようで、母屋の魅力を高めようという取り組みを始めた。参考にしたのが、湯布院の「まちづくり」で、別府が栄えているときに閑古鳥が鳴いていた湯布院。自分たちのまちの、緑・空間・静けさこそが自分たちの町の価値があると考えたからだ。

その成果で全国一、行きたい場所となり、「静けさ」の議論ができる事が素晴らしく「静けさに価値がある」に気づくことが大切である。

またまちの価値を考えるとモナコも面白いと。世界新三大夜景に選ばれたことを契機に交流がスタートした。

モナコは安全が守られたまち。資産を守る町。犯罪の抑制された町。エフワンの町であります。なぜF1が開催されるのか。「できない事をやるから価値がある」との考えで国民を巻き込んで個性を強みに取り組んでいる。プラスにするかマイナスにするかは住民がどう取り組むか、どう考えるかが最も大切である。

長崎にクルーズ船がやってくるのは大陸に近い（中国に近い）という個性を強みにすべきとモナコから学んだとの事。

わがまちの価値～価値に気づく

長崎ではH16年に恐竜の骨が発見され、H22年化石と断定されている。魅力がないよというより、あるよという「まちづくり」が大切と。

沢山の恐竜の骨を展示される恐竜博物館を建設。その建物の建設のコンセプトに外とつながっている建物というのがあり軍艦島をバックにし一体化した博物館が建設している。また長崎とオランダのつながりを示す博物館であり、周辺に恐竜の形の遊具を整備した子ども広場をつくり、恐竜バーガーを考案し販売を開始している。

また、軍艦島においては、地元ではさほど価値のあるものだという認識はなかったようで、昭和49年閉山されましたが、外国からたくさん来るとは予想していなかった。

世界遺産にという動きがあったが、「無理だろう」と思っていたが、実際H27登録されることになった。私たちが気づいていない価値が町の中にある事に気づかされたものだ。

また、長崎にはたくさんの教会があります。教会が世界遺産になるとも思ってなく、地元で気づかない・気づいていなかった事は「世界遺産」に認定され知れることになった。

さらに「価値」に気づくために「長崎さるく」をスタートさせ、歩いていると町の中に物語が眠っているようで、ある市民は「市民はコースづくりはするがガイドはしないといっていた。が、あまりにも面白すぎて話さずにはいられない」という現象がおこったエピソードもある。

こうした取り組みの3分の1は観光につながり、3分の2は「まちづくり」につながる意識をもって進めて来ている。

わがまちの価値～価値を磨く

景観専門官制度を設置して10年になる。鍋冠山展望台のバリアフリー化をはじめ、出島表門橋の架橋にも取り組み、特に出島表門橋については3つの課題をクリアしなければならず歴史的価値を残しながら景観も損なわないように配慮している。

出島は歴史的価値のあるもので、これまで橋を渡って出入りができなかったが、橋を架ける事でより当時に近いものとなっている

そもそも3つの課題とは、出島本体は歴史的価値があるので、工事による手出しはでき

ない。河川法の関係で橋脚は一つだけと決められて、出島より目立ってはだめだ、というものだった。これを何とかクリアーして実現できた。この取り組みを通じて高尾専門官には職員を景観を守る視点で育ててほしいとお願いし、役所の制限を突破してほしいともお願いした。

また、レンガ造りの修道院もあり、直近では児童養護施設として利用されているが、この外観をいかに残すかが課題となり、民間企業の皆さんの知恵をもらいながら進め、再来年開業することになり、その改修にも風景にあった物をコンセプトに進めている。

わがまちの価値～価値を生み出す

高田社長のスタジアムプロジェクトをはじめ長崎大学 BSL-4 がスタートしたのも価値に当たると思っている。

世界に貢献する長崎。感染症に対応する長崎の価値が上がる。それによって企業誘致もすすむ。

大学の存在が大きいと。

さらに若い人たちが泊まれる、仕事しながら泊まれる制度づくりに取り組んでいる。

「さかのうえん」坂と農園をかけた取り組みが進み、危険家屋の除却後の跡地を若者が農地を作成しながらコミュニケーション図る取り組みも進めている。

企業に「なぜ長崎を選んだのか」と尋ねると「地域課題があるから」と答えられ、「課題」はチャンスとなると考えている。地域課題を資源ととらえ価値を気づくためにもその意見を聞き、見る事が大切とも。

長崎で根付き暮らす「土の人」と、そのまちを訪れる「風の人」がまちを感じ、交流する事ではじめてまちが形成されるように思われる。

「風の人」は若い世代のようだ。若い世代の知恵ネットワークを加えて実現する。長崎らしいまちを創っていききたい。丁度代さの長崎を創っていききたい。長崎ライフをめさして「まちづくり」を進めていききたいと。

◎一般報告について

高尾氏は、一人官学民連携であると自負されている。

土木専門で景観を担当し、田上長崎市長より景観専門監として任命され、10年続けて気づくこともあり、次の「まちづくり」へのきっかけとなればと引き受けたそう。

身分は非常勤職員として、長崎市の公共デザインの指導管理を担っておられ、長崎を訪れた皆様が来てよかったなと思える体験に創出できないか、貢献できないかと職員と議論を重ねてきた。

求められえる価値には、①生理的欲求②安全の欲求③社会的欲求④承認欲求⑤自己実現、欲求があり、①②のような「低次の欲求」が満たされると③④⑤の「高次の欲求」が芽生えるといわれている。

そんな中、交流産業で食べていける「まち」をめざして、「長崎に行ったら体験できるものを長崎は持っているか？」がテーマとし、9年間で100回以上の監修が入り年度当初に関係課とヒアリングを進めてきた。

さらに部署には属していないので、各課より相談があれば随時対応する形態をとっている。決められた予算内で行う事を大前提にすすめ、市民ワークショップなども開催し事業をすすめてきている。

1 平和公園の整備について

過去の議論・経過を踏まえつつ未来へつなぐことを目標に進められ、平和公園関係で30か所の事業に取り組んでいる。手を入れた後に完成度が高まる事を目標にし、また低予算で知恵を出し合えば必ず実現できるとの思いもあったようだ。

2 稲佐山山頂電波塔ライトアップ

コンセプトは「地域に根差したプロジェクトへ」とし京都の大文字送り火を発想に事業を展開、稲佐山を見上げる市民が増えてきており、故郷を思い出すような整備を心掛けている。また、部分から全体に働きかけることを心掛け、行政では一気にできない事を踏まえながらその議論の積み重ねが大切だと考えられ取り組んできた。

3 町中夜景景観整備事業・長崎駅周辺整備

長崎市は平地の少ない土地で、夜景も本当にきれいだ。その夜景を壊すことのないように駅自体も風景を損なわないような整備が進めてきている。

こうした景観専門監として職員、市民と意見を交わしながら、歴史を損なうことなく長崎の「まちづくり」を進めていく。

まとめ

地域が抱えている課題はこれまでの縦割りの組織体制による分野ごとの施策実施は到底太刀打ちできない。

「小さな目的」の達成を積み重ねても「大きな目的」が達成されない時代に私たちはまちづくりに携わっている。縦割り制度の中で分野の境界を越えビジョンを持って仕事に取り組む人材が自治体に多く存在している地域が、分野融合型のクリエイティブな成果を出しより良い地域になっていく。まちづくりを行うのは人である。